

過渡期社会の名画 『サンベルナル峠を越えるナポレオン』

『サンベルナル峠を越えるナポレオン』
(ヴェルサイユ宮殿蔵)
(『社会科 中学生の歴史』 p.141掲載)

ナポレオン時代は、近世から近代への過渡期にあたる。したがって、前時代からの遺制や遺習が多数存在したと同時に、近代あるいは現代に直接つながるものが、いくつか発現した時代でもあった。そしてナポレオン・ボナパルト自身が、過渡期のこのような特徴を体現していた。ナポレオン期研究の第一人者であるルイ・ベルトランは、すでに40年ほどまえに、次のように指摘している——「時代に遅れていると同時に、時代に先駆けてもいた人物、それがナポレオンであった。彼は最後の啓蒙専制君主であると同時に、近代国家の預言者でもあった」。

国費でもって制作された当時のさまざまな絵画に、ナポレオンとその時代のこのような特徴がよく見てとれる。その代表が、ダヴィドによる『サンベルナル峠を越えるナポレオン』（1801～1805年）である。

サンベルナル峠（正確にはグランサンベルナル峠）は、スイスとイタリアを結ぶ要路であるが、冬から春にかけては積雪のせいで往來が困難になり、遭難事故も多発する。英語名ではセントバーナードといい、その名の救助犬が有名である。

この峠は、ポエニ戦争でカルタゴの将軍ハンニバル(ANNIBAL)が戦象を率いて越えたとされ、この高名な英雄の記憶と結びついた場所である。また8世紀にはカール大帝(KAROLUS MAGNUS)が数度にわたり、ここを通過してイタリアに侵攻したと考えられてきた。

1800年5月、ナポレオンは4万の軍勢をひきい、まだ雪深いこの峠を越えてイタリアに侵攻し、6月にオーストリア軍をマレンゴで破った。スペインのカルロス4世は、ナポレオンとの協調を望み、8月にナポレオンの肖像画を1枚、当代随一の名匠とされていたフランス人のダヴィドに注文し、

これをマドリードの宮殿内にかざることにした。日の出の勢いにある隣国の支配者へのおもねりであった。そしてフランス政府も、同様の絵を3枚、ダヴィドに追加注文したのだった。

騎馬姿でえがかれることになったのはダヴィドの好みで、題材がサンベルナル峠越えになったのはナポレオンの選択であった。そして、前景の岩にハンニバル、カール大帝、そしてボナパルト(姓でなく名で呼ぶのは1804年に皇帝になって以降のならわし)3人の名前を刻み、ナポレオンを前2者とならぶ英雄として表象するというしかけは、ダヴィドの発案だと考えられている。

じつは、カール大帝とサンベルナル峠とのつながりは、ヨーロッパ文化のなかで、ハンニバルほどには深く浸透していない。にもかかわらず大帝の名前がえがかれたのは、文化戦略なるものがあつたからにはほかならない。カール大帝は武力で西ヨーロッパの主要部を統一した人物であり、大帝のこの事績と、それから1000年後、ナポレオンによるヨーロッパ大陸主要部の制覇とを重ねあわせ、大帝の後継者としてナポレオンを粉飾するという戦略である。

ダヴィドのこの絵には、もう一つ別の粉飾もある。画中のナポレオンは、強風をものともせず馬上で指揮をしている。颯爽とした姿である。だが、氷雪でおおわれたけわしい峠を馬に乗って越えるのは不可能であり、雪がなくても、手綱を引きしめ鐘(あぶみ)もしっかりふまないと山越えはできない。実際にもこの時のナポレオンは、悪路に強いロバに乗っていたと伝えられている。

専制的な君主の意をおしはかって個人賛美の絵画が制作されるというのは、前近代的な慣習に他ならない。このような絵画が、支配者層のみが足をふみいれる宮殿にかざられたというのも、前近代的である。しかし、ダヴィドのこの絵は、宮殿だけでなく、ナポレオンの指示により、傷痍軍人施設(パリのアンヴァリッド館)にも配布された。「近代国家の預言者」は、19世紀後半以降に登場する大衆政治家のように、民衆の動向を重視し、それをあやつることに意をはらっていたのである。

(京都大学教授 杉本淑彦)